

平成25年度宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成25年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成26年3月10日(月) 17時30分～19時30分
場所	宇治市役所 大会議室
出席者	(委員) 榊原会長 江口副会長 小池委員 下山委員 薮委員 吉田委員 田邊委員 伊家委員 荻野委員 小谷委員 鶴飼委員 上田委員 (事務局) 石田教育長 中谷教育部長 藤原教育部次長 山下教育改革推進室長 富治林小中一貫教育課長 市橋教育指導課総括指導主事 海老瀬小中一貫教育課総括指導主事 久保小中一貫教育課企画調整係長 米田学校教育指導主事 佐々木小中一貫教育課主事
欠席委員	大槻委員
配布資料	資料 平成25年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 小中一貫教育についてのアンケート報告書 小中一貫教育についてのアンケート報告書(概要版)
1 開会	・石田教育長 開会挨拶
2 報告及び協議事項	報告1 平成25年度小中一貫教育取組状況報告 (1) 全体報告 資料(5頁～)に沿って事務局より説明。 (2) 宇治中学校ブロック (委員) 宇治中学校ブロックチーフコーディネーター 今年の宇治中学校ブロックでは、より組織的に小中一貫教育へ取り組むことを目指した。また、チーフコーディネーターがより積極的に支援することによって、様々な取組を円滑に進めていけるようにすることも目指した。 まず、小・中合同研修会について、今年度は5月、8月、10月、1月の4回実施した。最後の合同研修会では各部会のまとめを行い、3月に各校の職員会議で来年度の方向性を確認した。夏の合同研修会では全体会を開き、宇治中学校長に「宇治中学校で大切にしていること」について講演していただき、中学校ブロックとして大切にしていこうことについての共通確認ができた。また、ブロックでの小中一貫教育への様々な取組について各教員が把握し易くするために、各専門部会で検討された内容を職員会議に盛り込むようにした。そして、各部の担当教員が文書だけでなく、口頭でも報告するというスタイルにした。 次に、組織としての専門部会について説明させていただく。宇治中ブロックでは9つの専門部会があり、全職員がいずれかの部会に所属している。合同研修会では各部会の担当者がその部会の担当する取組について企画している。専門部会の数は昨年度の12から9に再

編し、各部会の人数を各校均等に配置したことにより、人数の少ない菟道小でも全部会で複数の部員を配置することができた。

ここで、各専門部会での取組についていくつか説明させていただく。

教育相談特別支援教育専門部会では、小・中合同で生涯学習センターへスクールカウンセラーを招いて、保護者懇談会を行った。

特別活動部会では、中学校への半日入学を企画した。そこでは、中学校の本部役員が作成した中学校の紹介ビデオを用いて児童に学校紹介を行い、本部役員が児童の質問に対して回答した。また、中学生と小学生が直接交流する場となっていた。

3つめに、交流連携部会では、宇治中校区の地域行事である「ふるさとうじ21」の中でクラブフェスティバルというものを企画した。小・中教員の意見交流を活発に行ったことにより、小学校のニーズにあった企画立案ができた。また、広報活動も活発に行い、昨年度は40人程の参加だったものが、今年は約150人の参加となった。

生徒指導部会では、生活アンケートを行った。これは、子どもたちの生活の様子を把握するもので、去年は実施していなかった菟道小でも今年度は実施することができ、各校の結果を指導に役立てることができた。外国語英語部会では、中学校の先生の意見をもとに、小学校で指導する際にアルファベットのつづりと発音を繋ぎ易くするフォニックスについて共同で取り組むことができた。

最後に、チーフコーディネーターとしていくつかの専門部会の取組に参加していくことができた。また、保護者の取組にも参加し、保護者に対しても小中一貫教育の取組をアピールできた。

### (3) 榎島中学校ブロック

(委員) 榎島中学校ブロックチーフコーディネーター

榎島中学校ブロックでチーフコーディネーターとして小中一貫教育に取り組み、今年で3年目となった。これまで様々な取組を進めてきたが、そろそろ新しい風を入れなくてはいけないという思いを持ちながら、今年一年取り組んできた。今年で小中一貫教育に取り組んで6年目となり、小中一貫教育として進めてきた取組は定着してきたのではないかと考えている。この取組をどのように児童生徒の力に繋がる形にしていくか、保護者や地域に見える形で進めていくかということを意識して進めてきた。

今年度は、宇治市の方向性として、全ブロックで小・中合同研究授業を行うということが打ち出されていたが、その点については本ブロックでも弱い部分があったが、今年度は宇治市全体の動きの中で、1歩2歩と取組を進めていくことができた。今年度は北榎島小学校の5・6年生を公開授業学級という形で位置付けて、国語、算数、外国語活動の3教科について合同研修会を行うことができた。これに関わって、夏の研究会で各校の学力分析に取り組んでおり、そこで見えてきた課題などを研究授業に繋げるという取組を進めることができた。京都府の学力診断テストは小4と小6で実施されていたものが、今年から小4と中1での実施となった。中1の春に実施するということは小学校6年間の力を試されることとなる。しかし、それを実施するのは中学校ということになるので、これを小中

一貫教育として取り組まなければ、中学校のその後の指導に活かすのみに留まってしまう。しかし、小中一貫教育として取り組み、小学校と中学校の教諭が共に分析することで、小学校の6年間の指導を振り返ることができ、中学校での3年間の指導の進め方を考えることができる。これらを合同研究授業の中に盛り込みながら、児童生徒の学力向上に繋がるような指導のあり方というものを明らかにすることができた。まだ、3教科しか実施できていないので、来年度以降はもう少し教科領域を広げることや宇治学などの総合的な学習として取り組むことで、指導内容を系統的に深める上で効果的なのではないかと考えている。

保護者・地域に見える形で取組を進めることは小中一貫教育の全体的な課題でもある。これについて本ブロックでは、北槇島小学校の6年生のクラス代表、槇島中学校の1・2年生の学年代表がそれぞれの思いや将来の夢について語る「小・中学生の主張交流会」という企画を北槇島小学校で保護者も参加する中で行うことができた。また、児童会・生徒会が中心となり挨拶運動の取組を進めてくれたことも保護者・地域へのアピールになったと思う。しかし、小中学校の主張交流会なども本来はブロックの3校全てが参加する中で行いたかったが、槇島小学校と北槇島小の距離から時間的な制約があり槇島小学校の参加が難しく、槇島小学校へは主張交流会の映像を届けて説明を交えるという形で取組を進めた。これは、立地的に離れているということと、分散進学に伴う課題であると考えている。そういったことに絡んで、中学校に進学する6年生に向けて春休みの学習課題を出している中学校が増えているが、分散進学のある槇島小学校では進学先の2中学校で統一できていないということがある。今年度については、それでも小中一貫として一緒に取り組んでいく必要があると考え、一方の中学校に承諾を得て、同じ課題を用いて学習を進めていくということを行った。できることであれば、宇治市全体としてこのことについて取り組めればよいのではないかと思う。

#### (4) 南宇治中ブロック

(委員) 南宇治中学校ブロックチーフコーディネーター

南宇治中学校ブロックでは、小中一貫教育の全面実施の前年度より引き続き、各校の教務がコーディネーターを務め、一貫教育推進への取組を進めてきた。組織的な前進点としては、理科を担当している小中連携加配が小学校と中学校を繋ぐ要として機能した。児童会・生徒会の地域清掃ボランティア活動を実施したが、事前学習として6年生の全クラスと中学校全クラスについて環境教育を実施できた。また、今年度初めて6年生に中学校授業体験を実施したが、この取組についても担任との連絡調整や教育指導の準備、当日授業まで中心となって動いた。本校区で今年一番力をいれて実施できたのは、全職員が参加する合同研修会である。これは年間6回実施することができた。各専門部が取り組んだ授業研究会は事前研や事後研も実施できた。そして、クラブ活動支援や合同の挨拶運動などの児童・生徒交流活動にも力をいれることができた。

ここで特徴的だった取組を紹介したい。まず宇治学部が実施した授業研究会では、中国帰国児童が多数在籍する平盛小学校の日本語教師の先生方が西大久保小学校に出向いて6

年生を対象に中国帰国児童理解学習を実施した。中学生がカンフー体験指導を行ったが、これは理解学習前に中学校で帰国児童理解学習の第1弾として取り組んだものである。西大久保小学校では毎年宇治茶の授業を行っているが、今年度はこれを平盛小学校へ出向いて4年生を対象に授業を行い、小・小連携を進めることができた。どちらの取組も児童にとっては初めての体験であり、地域の特色を活かした実践として意味があったと思う。

また、宇治学部では校区のフィールドワークというものを小・中の教員が合同で行った。外国語活動英語部では、各小学校がそれぞれで行った授業研究会の事後研究などが充実したこともあり、特に中学校の英語教員にとっては小・中の接続を考える上で参考になるものとなった。

保護者・地域に見える取組という面では、掲示板の設置やカラー印刷での小中一貫だよりの配布を行い、一定の成果を収めたと考えている。中学校で毎年行っている学校評価アンケートの中に、「学校は積極的に学校の様子を公開しようとしているか」、「地域に関心を持ってもらえるように努力しているか」という項目があるが、これが年々良くなっており、今年度は92%の保護者が肯定的な回答をしてくれた。

最後に、次年度に向けての課題であるが、1つはチーフコーディネーターや加配教員はいただいているものの小学校の高学年の先生などは負担を抱えており、これを払拭してスムーズに連携していかなくていけないと考えている。2つめは、地域の学力向上にいかに取り組んでいくかということである。学力診断テストの活用や、小・中を見通した授業システムの確立、家庭学習を身につけさせていく方法について考えていかなくてはいけないと思う。

#### 〈質疑応答等〉

(会長)

学力診断テストなどの学力分析を受けた結果や学力向上の課題などから、小中一貫教育を活かした可能性や展望はどのように理解すればよいか。

(委員) 榎島中学校ブロックチーフコーディネーター

当たり前のことではあるが授業を大事にしなくてはならないということを小・中学校の教員で確認し合えた。

たとえば、学力分析から小4からの経年を比較していくと、小4の頃に数値が高かった児童が順調に伸びていくということには、必ずしもなっていない。その低下している状況を見ていくと、その時の学校、クラス、児童などの様々な状況が反映されて結果として出てきている。そういった状況からすると学習に向かう児童たちの姿勢というものを如何に安定させ、それが中1ギャップとよばれる不安要素でも大きく変わることはないように徐々にスキルアップしていけるような授業システムというものを皆が共通理解して指導していかなくてはいけない。小1の教師も小6を目指して指導していくのではなく、中2、中3まで見据えて指導していくということが日々の指導の中で充実して広がっていけば、児童生徒たちに本当の力をつけていけるきっかけになっていくのではないかと思う。そういったものを合同研究授業や学力分析を重ねながら、いろいろな要素を客観的な資料や実態から先生方に提供してい

き、理論だけではなく「こうなだから、これ大事ですね」ということが先生のなかに実感として入っていくことによって、日々の授業に繋がり、児童生徒の力に反映されると思う。

(委員) 南宇治中学校ブロックチーフコーディネーター

私が学力診断テスト等について課題として挙げたのは、資料 P6 の表を作成する際に、授業研究会、体験活動などにはたくさん書くことがあるが、学力診断テスト活用や授業システムについてはあまり記入することができなかったことから、取組に偏りがあったと感じ、次年度以降はこの部分を膨らませていかなくてはいけないと思ったからである。やはり学校それぞれの学力というのが最大の課題なので、今も特別支援教育的なアプローチで合同研修会の講演を行っているが、まだそれを授業システムに取り入れることや個々の生徒に繋げるといった部分が不十分だと思う。

(会長)

もちろん学校で頑張ってもらおうということが中心になるかもしれないが、地域の方もしくは PTA の関わりを含めて学校を応援するということがないと小中一貫教育というのは容易ではない。授業のことは先生方をお願いするにしても、より小中一貫教育がやり易くしていくために地域や保護者の方々の協力ということが学力向上の点で必要なのではないかと思ひ質問させていただいた。

## 報告 2 小中一貫校「宇治黄檗学園」の取組報告

(委員) 宇治黄檗学園 校長

平成 24 年に開校して今年度で 2 年目を終えようとしている。積上げ方式の開校なので現在は 1～8 年生まで 34 学級 1045 名での学校運営となっている。今年の運営目標は、開設・建築等で子どもたちを追い立てたということもあり、時間がゆったりと流れる黄檗学園にしようということで進めてきた。それは、学習指導や生徒指導を含めて一番ベースになる大事なところである。2 年目を終えようとしているが、校長として全体を見ていく中で教育の効果というものが一定実感できるようになってきたのではないかと思う。具体的にどのようなところで実感があり、どのようなところで課題があるのかということについて、資料 P16 を基に 4 つ視点で説明させていただく。この 4 つの視点とは、学校運営、学習指導、生徒指導、学校づくりである。

まず学校運営についてだが、資料 1、7 がそれにあたる。1 年目についてはこの部分でもたつた部分があったので、教職員の反省や児童の声、保護者の皆様方のご意見等を参考にしながら、本年度は相当程度改善させていただき、その成果が見えてきたのではないかと思う。開校当時は、なんでもかんでも一貫校として取り組むということを経験としていたが、今年度は中身においては、全体でやるのが効果的なこと、3 つのステージで考えることが効果的なこと、小・中に分けることが効果的なことに分けていった。例えば、体育大会や文化祭については、小・中別に行う中で相互に乗り入れていくという方法で行った。宿泊的な

行事についてはステージ別に行った。そういった改善を行っていく中で学校運営としては一定の形ができ、来年度全学年が揃ってもこの形でやっていけないのではないかと考えている。しかしながら、一番の悩みは校時問題である。小の45分授業と中の50分授業というものをステージごとにながりと変えていきたいと思っていた。5～7年に50分授業をいれられないかとシミュレーションして検討したが、給食とお弁当の問題がネックとなった。給食とお弁当を小・中別にやりながら中期に50分授業をいれるということが、どうしても無理であった。もう1つは中間休みで小学生を思いっきり遊ばしてやりたいということや、中学校の部活動なども課題となった。何度も何度も繰り返し協議をしてきたが、結論が出ずこれ以上時間をとれないということもあり、当面は校時については校種別に行っていくということになった。

2つめの学習指導について、全体として学力状況は一定の成果が感じられている。しかし、一貫校だからこの成果が得られているのかという点、比較するものがないため、現状としては一定の成果が得られているとしか報告のしようがない部分がある。例えば、子どもたちの声でも、授業が楽しく分かり易いというアンケート結果が出ているし、学力診断テストなどの結果を見ていただいてもわかると思う。ただ、ごく普通の地域のお子さんをお預かりしていることから、どこの学校でも出ているような、下位層対策や特別な支援を要する児童についての対応が課題となっている。

3つめの生徒指導については、学校の決まりをしっかりと守っている、違う学年の人と交流をする、下の学年にやさしく接しているという点について全体状況がよくなっている。これらは積上げ方式の強みなのではないかと分析している。ただ、生徒指導上の本校の一番の課題は不登校問題である。一貫校になったことによって不登校が減ったといえる状況にはなっておらず、今後も取り組んでいかななくてはならないと考えている。

4つめの学校づくりについては、2年間を経て学校づくりは安定した形で進んでいる。とりわけ地域の皆様方の協力というのは絶大なものがあり、様々な取組に地域の皆様のお力をお借りしている。特に、地域と一緒にやって取り組む学校行事は、中学生部分が部活動単位などのボランティアなどで関わっていくことができ、この部分は一貫校であって良かったなと思う部分であり、地域の皆様からも評価していただいている。

〈質疑応答等〉

(委員)

宇治黄檗学園は今年もとても視察が多かったと思う。先生方もご苦労されていると思うが子どもたちはどうなのだろうか。子どもたちが授業参観のときのように落ち着かないか、もしくは一貫校としての自覚が芽生えたりするのだろうか。

(委員) 宇治黄檗学園 校長

子どもによって違いがあると思う。私の見立てとしては、多くの皆様に触れることによって子どもたちが自覚を持ち、誇りを感じさせる一つのきっかけとなっているということである。それを学校でどう取り上げるかも大事だと思っている。基本的に褒めていただいたことは、担任や生徒が集まる場を通じて子どもたちに返していくということを行っている。

(会長)

施設一体型の一貫校として開校したが、不登校などの課題が継続してあるということであった。学力云々ということにも繋がるかもしれないが、何か妙案などはないか。

(委員) 宇治黄檗学園 校長

小・中学校の教員が一つの組織としているということで、相互に知恵を出し合えるということはプラスに働くと考えている。例えば、不登校や問題事象についての対応については小学校教員から見ると中学校教員の持っているノウハウというのは得難いものであると思う。また中学校教員から見れば、小学校教員の学習指導の細やかさや丁寧さはというのはプラスになると思う。それらを相互に刺激し合いながら学校運営を続けていけば成果が出ると考えている。

### 報告3 宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告

資料（アンケート報告書 概要版）に沿って事務局より説明。

#### 〈質疑応答等〉報告1～3について

(委員) 保護者

アンケートについてコンパクトに説明していただいたが、少し突っ込んだ質問をさせていただきたい。グループ別比較のところ、今後もデータ蓄積が必要ということであったが、現段階でのグループ別の比較において、分散進学有り無しには差があまりみられなかったということや施設一体型と分離型については設問により差が見られたということであった。どのような点で差が見られたかについて説明していただきたい。

(事務局)

まず、一体型と分離型については、先ほどの説明ではお話しできなかったが、報告書の最後に実際の設問を掲載してある。例えば、報告書P91の(2)の6の小学生向け質問では、「小学校や中学校の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う」というものがある。この設問では、P51の結果にあるように一体型の方が肯定的な回答割合は低くなっている。しかし、よく考えるとこれは当然の結果ともいえる。なぜなら、分離型であれば中学校から来られた先生が小学校で授業等をすればとても印象に残るが、黄檗学園の児童については中学校の先生も小学校の先生も自分の学校の先生という意識があ

ったとすれば、そのことは特別なことではないため肯定的回答の割合が低かったとも考えられる。このような場合には、アンケート結果を受けて一体型の黄檗学園が、この部分について取組を強めていかななくてはいけないということには繋がらない。このように設問に対する検討も含めて分析をしていかななくてはならないと考えている。ただし、子どもたちよりもある程度認識が深まるであろう保護者においては、P56にあるような「異学年交流や小・中学校との交流が多く行われているように思う」という人間関係に関するような設問については肯定的割合が高くでている。ここでは2つの点から挙げさせていただいたが、全般的には設問に対する検討・分析が必要であると考えている。

(委員) 保護者

P57で「リーフレットやたより、インターネットなどで、宇治市の小中一貫教育の取組状況を知ることができる」という設問について、「分からない」の回答割合が高い。これだけ小中一貫の広報をしていただいている中で、この結果というのは保護者側としても「見てない」「関心がない」ということなるので、学校任せになってしまっているという面で申し訳ないと思う。4年生くらいの保護者には塾や私立中学へのお誘いが届き受験を煽られているような気になるが、よっぽどの夢などが無い限りは、友達と一緒に地元の中学校に行きたいというのがほとんどだと思う。そこを6年生の子どもと保護者だけでなく、もっと低・中学年の保保護者や児童に対して中学校の先生などからアプローチしていくことはできないのか。

(委員) 槇島中学校ブロックチーフコーディネーター

宇治市では、AETを中学校ごとに配置している。当然、外国語活動は学習指導要領の中身から5・6年生が中心となるが、それでも外国語に限らず普段の授業からAETを全学年全クラスに入るようにするという方向性を打ち出させていただくという中で、数少ない学級活動や、例えば国語の全体の教科書の指導が終わった時間などを当てて1年生の児童も学期の中で2、3時間はAETの先生と一緒に英語に触れるという時間を作っている。それが、もしかしたら中学校を意識した低学年の積み重ねとなり、そういった子どもたちが中学校で英語という学習場面で力を発揮することに繋がっていくかもしれない。また、そういった場面を参観等で見させていただくということが、小中一貫を多くの方に見させていただくということになると思う。

(会長)

学校には相当ご尽力いただいていると思うが、なるべく普段通りに力を入れ過ぎずに行うようにしていかなければ、長続きしないと思う。頑張っているのはもちろんありがたいが、無茶に頑張りすぎれば様々な面で問題はでてくると思う。財政的・人的支援は教育委員会に依頼するにしても、宇治中ブロックのように組織再編などの工夫をいただいているところもある。まったく普段通りは無理かもしれないが、ある程度はそのようにやっていけそうな可能性はあるか。それとも、そこについては難しい部分があるのか。その



辺りの感触について学校側に伺いたい。

(委員) 宇治中ブロックチーフコーディネーター

そこを無理と思うとすべてが止まってしまう。それぞれの小・中学校の教員としても、今までの学習指導等の中で取り組んできているので、そこで進めていくにはチーフコーディネーターとして引っ張っていかなくてはならないという意識は持って活動している。どうしても小・小や小・中で考え方が違ったりする。年4回の合同研修会などでも共通理解がどれだけ浸透しているかという点と不十分な所もあると思う。その辺りは、チーフコーディネーターが引っ張っていく、もしくは後方支援に回るといった役割を意識して進めていくことで、小中一貫が普段通りのものとして定着していくのではないかと考えている。

(会長)

この辺りのことについて、地域関係団体・保護者の方々はどのように考えておられますか。

(委員) 地域関係団体

この委員会が始まって3年経った。それこそ当初は、先生方にチーフコーディネーターの業務を受けたものの時間がないというような悩みもあったようだが、今は専門部会まで作れるような力をつけておられる。しかし、目指すところは中学校の先生が持っているノウハウと小学校の先生が持っているノウハウをコラボさせ如何にして子どもを前に進めていくかということだと思う。ただ、3年前と比べると、3年前は地域の中でも小・中9年間という言葉は出てこなかった。そういう意味では小中一貫は徐々に浸透しているのだと思う。私も委員として、参観や合同研究を見ていく中で、小・小連携を進めて2つの小学校が1つの中学校に行くために同じベクトルを向いているということを感じた。それは3年間見てきて初めてわかることだと思う。分離型や分散進学のある学校でこの取組を進めるのは中々足並みを揃えるのが難しいと思うが、この3年間の取組の中で子どもにも浸透が進んでいると思う。学習の方では、家庭学習の大切さを感じる。学習の手引きも学校からいただいているが、中学校へ上がる子どもたちの学習テストに繋がる資料として、宇治市として足並みを揃えるためのものにできればいいと思う。

(委員) 保護者

アンケートのP57に「小学生でも、担任以外の先生や中学校の先生にも我が子を指導してほしいと思う」という保護者への設問について、肯定的回答割合が高いが、これは学力の指導のことなのか、それとも躾のことなのか。

(事務局)

アンケートを取った段階では広く指導と捉えていた。しかし、ご指摘のとおり保護者の方がどの辺りに期待を持っているのかということは、これから分析・検討を行わなくてはいけないと考えている。ただ、今の段階では広く指導と捉えていただきたい。

(委員) 保護者

それは難しいのではないか。今以上にアンケートの幅を広げていくと先生の指導を細かく広範囲にアンケートをとらなくてはいけなくなる。

(会長)

おっしゃるとおり、アンケートというのは幅広く意見を取り扱えるという良さもあるが、それをどのように解釈していくかというのは課題になってくると思う。

(委員) 保護者

小中一貫という言葉は、私の子どもがまだ小さいときに始まった。どういうことが起こるのか、どういうことをしていくのかという疑問が大きかった。私も今は役員をやっているのでも内容や取組が分かるが、一般の保護者の方はアンケートなどには回答しているものの、中身についてまだまだ理解されてない方も多いと思う。しかし、中学校の先生が小学校に行って授業をするなどの取組を行い、その話しを自分の子どもから家で聞いたりすることで今までとは違いが出てきていると思う。子ども同士の中でも意識が出てきているので、保護者としてもこと取組に積極的に参加していきたいと思う。

(委員) 宇治黄檗学園 校長

アンケート結果のまとめの中で、一体型と分離型について然したる違いがなく、今後データの蓄積をしていく必要があるという話があった。一体型というのは本校のことであり、分離型というのはその他の学校のことであるが、このアンケートを繰り返し行っても解釈のしよりのあることないことは変わらないのではないか。それを、データの蓄積という名目で今後もアンケートをやり続けても結果として見えてくるものがあるかどうか疑問である。例えば、P52の「担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う」という設問で本校は肯定的回答の割合が低くなっているが、これをどう解釈するのか。もっとナンセンスなのは「近くの小学校や中学校の様子がおたよりや掲示物などで分かるようになった」という設問である。この設問は一貫校にとっては全く意味がない。一体型と分離型を機械的にすべて比較するというやり方はあまり好ましくないと思う。これは、分散進学の有りに無しについても同じではないか。何をしたいのかという目途を立てた上で、その課題を明らかにする方法で調査してもらいたい。

(事務局)

今、おっしゃっていただいたことは事務局としてもその通りだと考えている。今回については、どういうデータが出てくるかも含め、すべての設問について機械的に分類していった。これを公表していくということになった場合には、その手法や意味合いは考えなくてはいけないと思っている。ただ、一方で強制的な内容にはなっていくが、施設一体型の学校を設置したという中で、それに対する行政評価も行っていかななくてはならない。最終的には、データの蓄積といっているものについては、整理した上でのことであるし、今回いただいた意見についても参考にさせていただきたい。

(会長)

データの解釈も含めて、アンケートというのは実施した後に怖い部分がある。カテゴリーの仕方によって数字が変わってくるので、その点に注意していただきたい。

(委員) 大開小学校(広野中学校ブロック) 教頭

資料の宇治市の小中一貫教育の中で家庭学習のすすめということを大きく出していただいている。西小倉中学校ブロックと広野中学校ブロックの2つで家庭学習促進実践事業に取り組んでいる。本年度よりの新しい取組となっているので、広野中学校ブロックでの取組について簡単に説明させていただきたい。

内容としては、資料のとおりであるが、国立教育政策研究所の山森先生をお招きして、家庭学習をテーマにした講演会を2小1中の教師及び保護者を対象に行った。また、先進校視察として、福井市にある足羽第一中学校と東郷小学校へ行き、それぞれの家庭学習の取組について研修した。2月に入ってから、大久保小学校において、家庭学習をテーマとした保護者懇談会を行った。これも2小1中の保護者が集まって行った。こういったことを行ってきたが、基礎基本をしっかり身につけるためには家庭学習が非常に大きなウエイトを占めている。学習の習慣をつけるためには、なかなか学校の中だけでは難しい。学年×20分くらいの家庭学習時間が必要であるという話や、予習を行い、授業を受け、復習をするという3段階で学習することで習熟・定着を行えるということが昔から言われていたが、こういったスキルだけではなく、学習意欲の向上が大切であるということをお山森先生よりご講義いただいた。

人的配置としては、家庭学習の指導員を配置し、家庭学習のやり方などについての個別指導や、プリントの作成などを行っていただいた。

啓発に伴うキャッチフレーズを「授業と繋がる家庭学習」として看板を掲げた。家庭学習単独ではダメなので、それが授業に繋がることを重視した。

また、自主学習ノートを配って、決まりきった宿題だけでなく自分のテーマを持った宿題を行うなどの取組を行っている。

25年度・26年度の指定ということで、暗中模索の中で始まったばかりではあるが、少人数加配の教師などの話を聞くと、こういう取組を始めてから、家庭学習を苦手としていた子どもの表情が変わっていき、授業への食いつきも変わってきたという話をしている。ま

だ取り掛かったばかりではあるが、今年度の整理をしながら来年度へ繋げていけたら良いと思う。

#### 報告4 宇治市小中一貫教育推進協議会の活動報告

資料（P3～4）に沿って事務局より説明。

（会長）

保護者・地域代表として学校視察を行ったことについての報告をお願いします。

（委員）保護者

私は宇治黄檗学園の学園選挙を視察させていただいた。リーダーという目に見える存在の先輩がいるというのは、子どもたちにとって頼りになっているのではないかと思った。子どもたちが真剣に立候補者の話を聞いている姿や、話をする側のアピール・主張をする姿も見ることができて、いいきっかけを見させていただくことができたと思う。

（委員）保護者

西大久保小学校へ南宇治中学校の生徒がバレーのクラブ紹介を行う際の視察に行かせていただいた。中学生が来るまでは少しふざけていた小学生が、中学生が来てからは目が変わっていた。中学生も最初は、小学生とうまく交わって指導することができなかつたのが、時間が経つにつれて段々よくなっていった。短い時間で子どもたちが変わっていくことを見ることができ、とても良い視察だったと思う。

（委員）地域関係団体

榎島中ブロックの北榎島小学校の授業参観を視察させていただいた。子どもたちが生き生きと活発に発表していたのが印象的であった。授業の後に、先生方が各教科に分かれて行う事後研修も拝見させていただいた。先生方も非常に熱心に意見交換されていた。その中で、分散型のご苦労というのを聞かせていただいた。私は黄檗学園校区の地域代表としてこの協議会に参加させていただいているが、自分のブロックと比較すると自分のブロックは恵まれていると感じた。視察を通じて、より小中一貫教育が確実なものとして成果を上げていくためには、分散進学の解消や時間的・距離的な問題の解決が必要であると思うし、そのためには一体型の学校というのが望ましいのではないかと感じた。このことから、教育委員会や宇治市には一体型へ向けた取組を進めてほしいと思った。

（委員）保護者

宇治中学校の地域連携は素晴らしいものがあったと思った。40年の歴史がある「ふるさと宇治21」を視察させていただいた。クラブ紹介などで中学生が小学生に教えているシーンでは、それぞれのクラブが工夫をしながら小学生に自分のクラブを紹介していた。地域の方も非常に協力的であったと思う。ここのブロックも神明小学校の分散進学を抱えているが、

それを差し引いても、地域とうまく連携しながらのイベントであったと思う。

私は広野中学校ブロックの地域代表であるが、本ブロックでも中学校区を基にした地域連携は大切であると考えているので、今回の視察はとても参考になった。

(委員) 保護者

榎島中ブロックの北榎島小学校を視察させていただいた。小・小連携ということで榎島小学校の先生も授業参観されていた。その後に分科会もされていた。そこを覗く中で先生同士の中での意見交流も活発にされていたし、どのような形で榎島中学校へ送り出そうとしているかというのがよく分かった。しかし、先におっしゃられていたとおり分散進学の問題というものも感じたので、進学に伴う校区編成についても見ていただきたいと思う。しかし、活発な意見交流もあり、PTAの小・中間の連携も見ることができ小中一貫教育が進んでいるということを確認できた。

(会長)

保護者・地域代表より4つのブロックの視察状況を報告していただいた。残り6つのブロックについて事務局より報告していただきたい。

(事務局)

まず、西宇治中学校ブロックについては授業研を公開された。このブロックの特徴は、チーフコーディネーターが中学校籍であったが、教科連携教員と併せて非常に多くの時間について出前授業を行った。このことから、小・中教員の交流が非常に進んだということであった。

北宇治中学校ブロックについても授業研を取組視察として公開された。北宇治中学校ブロックは研究段階から授業研究に取り組んでいるブロックで、他ブロックの参考となったブロックでもある。今年度は「学習意欲を高めるには」というテーマをもとに、広く保護者・地域を対象としたパネルディスカッションを実施し、保護者・地域へのアプローチも積極的に行ったということであった。

西小倉中学校ブロックについては、広野中学校ブロックと同様に家庭学習の研究を今年度から進めている。ここでは、家庭学習の手引きや自主学習ノートを効果的に利用した家庭学習の研究を行っており、これからの成果を期待される場所である。取組視察については、授業研究会を公開された。

広野中学校ブロックについては中学1年生による小学校6年生への紙芝居読み聞かせを行った。この試みについては小・中交流の新たなパターンであった。

東宇治中学校ブロックについては、半日体験入学の公開を行った。東宇治中学校は昨年度に引き続きブロック内の小・中育友会の合同研修会が実施された。この取組については、保護者を巻き込んだ取組のパターンとして特徴的であった。

木幡中学校ブロックにおいても授業研究会の公開を行った。木幡中学校ブロックは授業に参加している全教員が授業に入るという形をとっていた。このように、授業研究に取り組む

にあたっても特色を持たせて行っていた。

#### 報告5 平成26年度に向けて

(事務局)

平成26年度に向けてということで、2点説明をさせていただく。

1つめは、平成26年度は全面実施から3年目になるということで、これまでは体制づくりや計画に基づいた取組を実施するというを行ってきたが、これからは現在の体制や取組を基に、その中身の改善・工夫を行っていく段階であると考えている。具体的な取組については、今年度の継続を含めて次年度に説明させていただきたいと思う。

2つめは、推進協議会の要項の改定について説明させていただく。本協議会の設置要項では委員任期は3年ということで、平成26年5月末日で任期が終了となる。宇治市の小中一貫教育が全面実施の前の段階から全面実施に至るまで、その基盤づくりについてこの協議会の大きな役割を担っていただいたわけであるが、更に中身の充実を目指し創意工夫を行うにあたって、来年度以降も改めて委員を委嘱させていただき、本協議会の取組を進めていきたいと考えている。資料のP1～2に設置要項を記載しているが、来年度以降は広く意見をお聞きするためにするために、学校評議員などの新たな委員の幅を広げるということを考えている。これに伴い、第3条にあたって(5)「その他教育長が認めるもの」を追加する。また、連合育友会等の役員任期が1年である関連から、第4条の任期については1年と改定する。また26年度については教育部内で組織改編が行われることから、第9条も改定を行うこととなる。要項改定にあたっては、また皆様さらにもご意見をいただくことになると思う。

〈質疑応答等〉

なし

(会長)

最後に、来年度以降のことについて各委員から意見を賜りたい。

(委員) 南宇治中学校ブロックチーフコーディネーター

報告の中でも述べさせていただいたが、課題を2点ある。1つめは、いろいろな試みを実施したが、次年度は今年度の整理・改善を行い教員の負担感を解消することである。2つめは、学力について本ブロックでは家庭学習の手引き等ができていないので、他ブロックでの成果を本ブロックでも活かしていきたいということである。

(委員) 宇治中学校ブロックチーフコーディネーター

宇治中学校ブロックについては、今年度は授業研究というところまで進められなかったと

ということが課題である。9つの専門部会のうち4つの部会が授業に関するものであるが、来年度からは授業研究を進めていこうということで確認できている。チーフコーディネーターとしては、他の中学校ブロックの情報をもっと知るための、機会を増やしていきたいと思っている。

(委員) 槇島中学校ブロック

先ほど、宇治市としての来年度の方向性として内容の改善と工夫を図っていくということがあったが本ブロックについても、その方向性で行くということになると思う。ただ、先ほどからの話の中で、小中一貫教育をいままで行ってきたことの中で重荷になっているという話がでたが、その中でも成果がでてきているということ、特に高学年の教師は感じている。本校などは小中一貫教育を始める前から、担任間の交換授業や、小中一貫教育の教科連携教員なども含めた一部教科担当制というのを進めている。今の6年生の担任だと、8・9科あるうちの半分くらいの教材研究でよい。主たる先生が他にいるのでその先生を中心に研究をしてもらえる。そうすると、自分が担当している教科に対する教材研究がより深まる。私も高学年の理科に入り、5年生3クラス担当したが、いままでの小学校では1つの授業を3回行うことはなかった。担任は1時間1時間に違う授業を行っていたときより、余力ができ、それが子どもたちの指導につながると思う。そういったところの良さも感じながら進めているということをしてほしい。そういったものが指導の充実に繋がるんだという思いをもち、負担感を押しつける思いで進めているということをしていただきたい。

(委員) 大開小学校 教頭

各学校の取組も成熟してきていると思う。イベント的なものから継続的な取組みへと移行していくこと。それから、無理をしないでいいながら、あまり無理をしないであると小中連携というレベルになってしまう。小中連携と小中一貫は意味が違うので、9年間を見通したというところに拘っていきたい。

(委員) 黄檗中学校 校長

一貫教育の進行管理をするという点において、ブロックの取組を交流するというのとは趣旨が全然違う訳であるから、進行管理という点でこの組織体制でよいのかという点についてご検討いただきたい。

(委員) 地域関係団体

単純な不安として、今の担当されている先生方が異動されても大丈夫なのかという思いがある。

(委員) 地域関係団体

ブロック名について、何か1つの学園名をつけていければ、まとまりが強くなっていくのではないかと思っている。

(委員) 地域関係団体

もっと外にアピールしていただきたい。私たちは、推進協議会の委員として、視察等に行かせていただいているが、小・中の交流の場面を見させていただいているが、一般の保護者についても、現場にいつて見ることができるような機会を作ってほしいと思う。

(委員) 保護者

この協議会に参加させていただくことで、小・中の関係をすごく大事されていることが分かって大変勉強になった。私の場合は、末の子が今年中学校卒業となるが、もう少し早く分かっていたらいろいろなことを保護者の方にもお話しすることができたと思う。

(委員) 保護者

来年度にどうつなげていくかということについて、中学校ブロックでもっと保護者のネットワークを深めていければ関心も深まると思った。お母さんのネットワークというのは意外と強いものなので、現場に足を運ぶ前に口コミで不安感をなくすような情報を仕入れらたら滑らかに行くのではないかと思った。また、保護者が自分の子どもに関心を持てるように働きかけていきたいと思った。

(副会長)

宇治市の教育の抱える問題として、学力の問題と生徒指導の問題がある。これは随分昔からいわれていて、それぞれの学校で問題に取り組んでいると思う。私は、この問題をなんとかしていくには、小中一貫しかないと思っている。しかし、小学校と中学校はそれぞれの文化のようなものがあり、近くであってもその違いがあるということが永くあった。宇治市の重点施策である小中一貫教育には間違いはないと信じている。他市町村の知人からも「宇治市といえば小中一貫教育」という話を聞いているし、他市もそれを進めていこうとしている。やはり、今ある学校独自の様々な取組を進める中で、その上に小中一貫を進めることによる多忙感などは出ると思うが、宇治市においては、他市と比べて人的配置・予算が施されている。これは他市にはほとんどない。そういったところを現場としてはありがたいと思っている。いまコーディネーターが来年度の計画を立てている中で、それぞれ学校の行事などがたくさんあり、その中で本中学校ブロックは小中一貫教育の取組をいれていくのは非常に困難である。そういったなかで、スクラップ&ビルドというのが必要なのではないか。何かを積み上げていくときにスクラップの部分がないとしんどくなっていくと思うし、それではいい取組というのは成立しないと思っている。小・中それぞれでやっていることを思い切ってやめてしまい、小中一貫で「コレ」というものを打ち出していかなくはないかと思う。小・中は近くであっても顔と名前がわからないということがある。今年度の南宇治中学校ブロックについては、小・中の先生間の懇親会や、3校の教員の写真を掲示したりして、それも1つの工夫になったのではないかと思っている。いろいろ課題もあったと思うが来年度以降また知恵を出し合いながら進めていけたらと思う。



(会長)

それでは、これで協議会を終了させていただきます。

### 3 閉会

- ・ 山下室長より閉会の挨拶